

蒸発の



衝動



YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆

Duo-Yamanka

蒸発の衝動

山中與隆

目次

蒸発の衝動 1

〔ドライブ初日〕 1

〔二日目〕 65

〔三日目〕 96

〔四日目〕 178

〔五日目〕 202

〔六日目、そして・・・〕 209

編者あとがき 225

蒸発の衝動

作 中山俊文

1

〔ドライブ初日〕

弥生と比呂志は、朝早く広島の家を出てから既に五時間以上、二百キロくらい走って来た。下関近く

の車の多い大きな通りを走っている。トイレを借りるためだけだが、ちようど左側にあつたグートという大きなホームセンターの駐車場に入った。この日初めての小休止でもあつた。

平日だったが、店内は結構買い物客で賑わつていた。トイレをすませた比呂志は先に車に戻つて妻の弥生が戻つて来るのを待った。

リタイア生活の藤原弥生、比呂志夫妻はよくドライブに出かける。車は、もう買ってから五年目のシルバーカラーの、最もありふれた軽四輪だが実に良く走る。年間二万五千キロ以上走っているだろう。シートはフルフラットに出来るようになっていて、フルフラットと言っても多少のでこぼこはあるが、彼らは遠出のドライブ中に何度もこのフルフラットを利用して車中泊もする。

この車になる前は、同じメーカーの赤の、そしてその次は緑のワゴン車に乗っていた。これも大変気に入ってそれぞれ十五万キロくらいは乗った。軽四輪に乗り換えたのは定年後で、年金生活になったための経費節減が主な理由だ。乗り換えたばかりのときは、ちよつと上り坂になると大きなエンジン音にびっくりしたし、何と言つても走行中のタイヤの音が喧しい。前のワゴンが非常に静かだったので、ク

ラシック音楽好きの彼らにとっては、ドライブ中に静かな音楽が聞きづらくなつたのも不満だつた。それに何となく都落ちしたような気分もあつた。

しかし軽四輪にしたための経済効果は大きく、ガソリン代、車検代、税金、保険さらには高速料も普通車より安い。またいつも実感するのは駐車場や狭いところでの小回りの良さは、これまでのワゴンとは雲泥の差だ。今ではこれほど便利なことはないと

思っている。比呂志は、

「宝くじが当たったら、ロールスロイスの軽を買おう」

と言っているくらいだ。そんなものがあるのかどうか知らないが。

彼らのドライブは、たいていは日帰りだが、今回は奮発して二泊三日である。一般道ばかりを使って九州を一周する計画だ。藤原家では特に急ぐとき以

外は高速道路を使わない。もちろん儉約ということもあるが、ただひたすらわき目もふらずに走り続ける高速道路より、通り過ぎる街の雰囲気を感じながら走る一般道が好きなのである。彼らに時間だけは充分にある。特に観光の目的地などは定めずに、敢えて言えば九州一周と言うのが今回の目的であつた。

妻の弥生がトイレから帰ってくるのを待ちながら、

比呂志は弥生と当時まだ大学生だった娘と三人で飛騨の白川郷にドライブしたときのことをぼんやり思い出していた。ドライブは好天に恵まれて調子よく進んでいた。三人で合掌造りの民家を見物して車に戻ったとき、弥生は出かける前にもう一度トイレをすませておきたいと言って、一人車から降りて駐車場のトイレに行った。

弥生が戻ってくるころを車のバックミラーで見

つけた比呂志は、何を思ったのかスーツと車を発進させた。弥生はそれを見てびっくりして一瞬立ち止まった。比呂志は十メートルくらい進んだところで車を停めると、弥生が乗るのを待って出発した。弥生を待たずに車を発進させたとき、娘も比呂志と一緒にになって笑った。ちよつとした冗談だとわかっていたからである。もちろん比呂志も、妻を軽く驚かそうとした冗談のつもりだった。しかし弥生は信じ

られないほど不機嫌になり、それ以後は車内の会話もなく、CDトレイに入っていたヴィヴァルディの軽快な音楽も弥生は乱暴に消してしまった。それまでの快適なドライブは打って変わった雰囲気になった。

想像もしなかったほどの弥生の不機嫌さを見て、もし本当に弥生を置き去りにしていたらどうなっていたのだろうか考えると、比呂志は恐ろしくなったの

だった。弥生が不機嫌になったからだけではなく、比呂志は自分がどうしてもそんなくだらぬ冗談を思いついたのか、自分自身の行動が理解できなかつたのを覚えている。このことを思い出すとき比呂志は、妻を驚かせる愉快さではなく、自分のそのような衝動に対して苦いものが体中に流れる。そんなことを考える自分に対して、恐ろしさと不快さを感じるのだった。

ホームセンターの店内入り口から弥生が出てくるのを見つけた比呂志は、何か自分でもわからない衝動に駆られて、突然車を発進させようとした。その瞬間だった、比呂志は外部からの強い力によって助手席の方に突き飛ばされた。その勢いで比呂志は左側頭部を助手席の窓に強く打ち付けた。そして比呂志の頭が朦朧としている間に車は走り出して、弥生は置き去りにされた。そのとき運転席には比呂志を

突き飛ばした男がいたのだ。

弥生は、走り去ったのが自分の家の車だとは思わなかったのか、それともそのとき一台の車が走り去ったこと自体に気が付かなかったのか、何ごととも無いように車のあつた辺りに戻つて来た。しかしそこに自分たちの車は見当たらない。

ありふれた色と形の車だったので、夫婦とも広い駐車場ではときどき自分たちの車を探すことがある。

このときも弥生は、停めてあつた場所を思い違いしているのだらうと辺りを探した。ある程度広い範囲を探したが見つからない。二度も三度も往き来して探した。まさかと思うようなまったく別の場所も探し歩いた。たしかこんな端の方ではなかつたと思ひながらも、丁寧に見て歩いた。その間に比呂志もトイレから返つてきて、探し回っている弥生を見つけてははずだ。だがいつまでたつても比呂志の姿も現れ

ない。だんだん弥生の心にあせりと不安が沸いてきた。ついにはその駐車場に停まっているすべての車を調べたと思うくらい探し回った。

弥生は車種については詳しくないので、色と形が似ていると

「あれだ」

と思ったりしたが、近づくことと違うことがわかる。「広島×××」というのは覚えていなかったが、その下の

「3636」という番号ははつきり覚えている。車の色と形とメーカーのマークそれに「3636」が目印である。「3636」の前にある平仮名も覚えていない。覚えている番号を確かめながら探したが見つからない。こんなとき、ときどき比呂志は車から降りて、車の傍に立って手を振ってくれたりするところがあるが、いまは手を振っている比呂志の姿もない。

弥生は三十分くらいも探していただろうか。見つからないので途方にくれた。いま自分がどうしたらいいのかまったく頭が働かない。弥生はたまたま近くにあるガーデニング用品売り場にいた親切そうな顔つきの年配の男性店員に相談した。誰かに頼らずにはいられなかったのだ。

「いま、主人が車で待っているはずなのに見つからないのです。どうしたらいいかわからなくて」

「お車を置かれた場所とか、勘違いしてないですか？」

今にも泣き出しそうな顔をした中年の女性に、店員は穏やかな声で受け答えした。

「ええ、わたしもそう思つて最後には駐車場の端から端まで全部見て歩いたのに見つからないのです。さつきから三十分は探したのですが」

「それは大変でしたね。お疲れかもしれませんが、

もう一度だけわたしもご一緒しますから探してみましよう。案外、『なんだ』と言うように見つかることがあるものですよ」

店員は別の店員に売り場を任せて弥生とともに探し始めた。二人は広い駐車場を一周したがやはり見つからなかった。

「奥さんが探された通りだったでしたね。どうしたらいいですかね」

親切な店員は周りを見回しながら考えていたが、

「とりあえず店内放送をかけてみましょう。お名前と、どちらからおいででしたか？」

弥生は、広島から来た藤原比呂志だと伝えた。店員は、名前を復唱してから、弥生を待たせて店の中に入っていた。程なく女性の声で、

『広島からおいででの藤原比呂志様、奥様がお待ちです。ですのでガーデンニング売り場までおいでください』と

放送が流れた。

弥生はガードデニング用品売り場の前で待った。しかし比呂志は現れない。

「おいでになりませんね」

客の対応などをしていた先ほどの店員が心配そうに弥生のそばにやってきて言った。

「警察で相談するのがいいですかね」

「警察ですか？警察って近くにありませんか？」

「近くですが歩かれるとちよつとありますので、店
のものにお送りさせます。しばらくこのままお待ち
ください」

そう言うと店員は急ぎ足で店の中に入って行つた。
すぐに、同じ制服を来た若い店員を伴つて出てきた。
黒縁のメガネをかけた背の高い男性だった。

「お待たせしました。この者に警察までお送りさせ
ますので、あとはそちらでご相談ください」

と言つて、若い店員に指示した。店員は、

「直ぐに車を取つてきますのでこのままもうしばらくお待ちください」

と言つて、再び店の中に入つて行つた。

弥生は、トイレを借りただけで何も買い物はして
いないのに申し訳ないと思つたが、そのことは口に
出さなかつた。そして、警察に行けば、すぐに比呂
志の乗つた車を見つけてくれそうな気がしていた。

車体に『日曜大工のことならグート』と書いた、
店舗と同じ赤と緑の線の入ったライトバンが近づい
て弥生のいるところに停まると、さっきの若い店員
が降りてきた。

「汚い車ですが、すみませんあちらからお願いしま
す」

店員は弥生に、助手席に乗るように言った。弥生が
乗ると車は走り出した。事情を説明されていたと見

えて、店員は、

「ご主人は、いったいどうされたのでしようね」と言つた。

「わたしにもわかりません。すみません。お忙しいのに」

店員はそれ以上何も聞いたりはしなかつた。

その僅かな沈黙の時間に弥生は、白川郷でのことが頭をよぎつた。しかしそのことは口にしなかつた。

「実はわたしたち広島からドライブの途中で、お宅にはお手洗いを借りるだけで立ち寄ったのです。それなのにこんなご迷惑をおかけしてしまつて申し訳ありません」

店員は少し間を置いてから、

「とんでもありません。これくらいお安い御用です。私どもとしてはたとえトイレだけでも、とにかく店にお客様がおいでいただくことがありがたいので、

どうぞご心配なく」
と優等生の返事が返ってきた。

道は混んでいたが二、三分で警察に着いた。弥生は警察の玄関前で車を降り、若い店員に丁寧に礼を言った。車は警察の駐車場から信号機のある横の道の方に出て、信号が変わるのを待っていま来た方に走り去った。

弥生は、恐る恐る警察の中に入った。弥生は、警

察署はもちろん交番にさえも入ったことがない。警察署の中の広いフロアには、カウンターの向こうで普通の会社のように机について事務を執っている人たちがたくさんいる。ただ市役所などよりも心なしかひんやりしていると弥生は感じた。制服を着た警察官が玄関を出入りしているので、ここが警察署だと言うことがわかる。弥生はどこで相談すればいいのかとキョロキョロしていると、正面のカウンター

の女性から、

「どうされましたか」

と声がかかった。

この女性は警察の制服を着ていなかった。弥生が事情を話すと、女性はこの状況にどう対処したらいいのか考えてから、

「ご主人に携帯か何かで連絡されましたか？」
と弥生に聞いた。

「それが出来れば、もちろんしています。でも主人は携帯持っていないので」

比呂志も自分用の携帯電話を持っているのだが、弥生と一緒にドライブに出かけるときには、弥生だけが持って出ることになってしまっている。運転中は電話しないことにしているのだ。

警察の女性は、この先の目的地や宿泊の予定、自宅の住所、連絡先、夫婦の名前、年令、車の車種、

年式、ナンバーなどを聞きながら、こういう場合の調書のようなものに書き込んでいった。弥生は、車についてはあまり答えられなかった。メーカーと××ワゴンと言うのは知っていたが、ナンバーについては「3636」しかわからない。

これらに受け答えしながら、弥生はこの調子だとすぐに比呂志の乗った車が見つかりそうもないという気がしてきた。考えてみれば、何処に行ったかわ

からない車を、いくら警察でも魔法のように見つけれられるはずがない。

「ご主人の搜索願を出されますか？」

警察の女性が弥生の表情を窺いながら聞いた。弥生は、比呂志は家出人扱いになるのかと思つた。

「搜索願を出したら、直ぐに探してもらえるのですか？」

「ですがこのケースはお宅の車が見つかつたら連絡

することになります。犯罪や事故などではないと思
われるので、検問をかけて車を探すと言うことはで
きかねますから、何らかのことで発見された場合と
言うことになります」

それを聞くまで弥生には『犯罪』か『事故』とい
う発想はなかったが、考えてみればそれも絶対に無
いとは言い切れない。しかしいまは、それは現実的
ではなさそうだと感じた。犯罪で無ければ、殺人事

件の犯人を捜すときのように聞き込みをしたり、立ち回り先を捜索したりすることにはならないだろう。当然のことだと弥生は思った。

「それだと主人が事故とか、何かトラブるにでも巻き込まれない限り見つからないと言おうことですか？」

弥生は、『警察で相談したら』と親切な店員に言われたときの期待感が消えていくのを感じた。そのと

き。パトカーがサイレンを鳴らしながら出て行くのが聞えた。弥生は、

「いまの、何か関係ありませんかね？」
と聞いたが、

「ここは警察ですから、パトカーはしよつちゆう出入りしますから、ご主人のこととは関係ありません」と冷たく答えた。

弥生は、この人はここに座って弥生と話している

のに、どうして即座に関係ないと断定できるのだと思つたが、それ以上そのことは言わなかつた。

弥生は沈んでいく気持ちの中で、とりあえず自宅に戻つて比呂志からの連絡を待つことにしようと考えた。弥生は時間の経過とともに落ち着きを取り戻しつつあつた。そうすることを警察の女性に告げて、その場を離れようとしたとき、

「帰られる前に、念のためもう一度そのお店に行か

れたらどうでしょう。ご主人は何らかの理由で一時的にその場を離れたのかもしれませんが。たとえばガソリンを入れに行つたとか。そうだったら今頃駐車場に戻られて、奥さんを探しているかもしれませんよ」

とアドバイスしてくれた。それにしても警察のその女性は、この出来事をあくまでも弥生か比呂志のちよつとした思い違いくらいにしか考えていないよう

だ。それでも、弥生はそれもそうだと思つたので、
広島に帰る前にもう一度さっきのホームセンターに
行くことにした。

警察署を出た弥生は、来るときに送ってもらつた
距離なら歩いて直ぐだと思つて、徒歩でホームセ
ンターの方に向かった。片側三車線の広い道路は、
上下とも相当な数の車が走っている。その遥か前方、
先ほどのホームセンターがあると思われる辺りに幾

つもの看板が賑やかに立っているのが見える。その中にグートと言うのも見えた。

歩きながら弥生は、『三十分以上も探し回っていたのだから、仮に警察の女性が言うようなことがあったとしても、その間には帰ってくるはずだ』と思つた。それでも、今度は比呂志が駐車場や店の中を探し回っているかも知れないという気がしてきた。歩いたりしないでタクシーで駆けつけたほうが良かつ

たかも知れない。しかし空車のタクシーがそんなに走っているようには見えない。それよりも急いで歩こうと考えると、弥生は歩を速めた。ウォーキングシューズを履いてきていて良かったと思つた。

グートに着くと、弥生はまずガードニング用品売り場の年配の男性店員を見つけて、警察でのことを報告した。店員にしてみれば、一度警察にバトントンタッチして解放されたと思つた面倒な客がまたやって

来たわけだが、さつきと変わらない親切そうな笑顔で弥生の話を聞いてくれた。だが内心はきつと、『この女性は直ぐには解決しそうにないことを知って、また何か助けを求めてやって来たのか』と思ったに違いないと弥生は思った。しかし弥生が、

「仕方ないから家に帰って主人からの連絡を待つことにします」

と言ったので安心したようだった。

「その前に、念のためもう一度駐車場を探してから帰宅するように、アドバイスされたので、ここに来ました」

と言つて探し始めようとした。

店員は、

「では、その間にもう一度店内放送をかけてみましょう。お名前は何とおっしゃるのでした。それとどちらからお越しでしたか？」

と聞いた。弥生は、さつきも言ったのにと思つたが、この人も年取っているなと思ひながら、もう一度広島から来た藤原だと言うと、店員は

「わかりました」

と言つて店内に入つて行つた。

弥生が一人で駐車場の中を探して歩いてみると、『広島からご来店の藤原様、いらつしやいましたらガーデニング用品売り場までおいでください。奥様

がお待ちです』と放送が流れた。

弥生は今回もほとんどすべての車を見て歩いたが、車も立ち上がって手を振る比呂志の姿もなかった。そして、放送があっても比呂志が現れることもなかった。

弥生は店員の親切に礼を言い、警察に連れて行ってくれた店員にもよろしく伝えるように言っ立去ろうとした。そのとき店員が、

「これからJRの駅に行かれるのですね。ここからですと長府の駅ですが少し距離がありますから私がお送りしましょう」と言ってくれた。

それまで置き去りにされた自分のことばかり考えて惨めな気持ちになっていたが、初めの動転した気持ち落ち着くに従って比呂志のことも心配になってきた。心細くなっていた弥生は、この親切な申し

出をありがたく受けることにした。

今度は年配の店員自身を送ってくれることになった。弥生が助手席に乗ると店員は、自分の名刺を差し出した。名刺にはグート長府店、副店長恩田邦彦とあつた。

弥生は、副店長だから若い店員に警察まで送らせたり、いまも自分を駅まで送ってくれたりするのを、てきばきと自分の判断でしているのだと納得した。

「一応ご主人は私どもの店で行方がわからなくなつたので、何かありましたらその名刺のわたしに連絡してください。それから、もしお差し支えなかつたらお客様の連絡先を教えてくださいただけないでしょうか」

と言つて、胸のポケットに押し込んであつた分厚い手帳を取り出して、何の書き込みもしてない白いペー지를開き、ボールペンを添えて弥生に渡した。

弥生はそれに、住所を郵便番号から書き、藤原比呂志、弥生として、そのあとに自宅の電話番号と自分の携帯電話の番号を書いた。受け取った恩田は、弥生が書いた内容に目を通すと、

「そうだ、お車についてもお聞きしておいた方がいいですね」

と言って、自分が書き足すから弥生に車種や番号を言うように促した。大体のことは一緒に探している

ときに言つてあるので簡単にすんだ。

「ありがとうございます。それで、この比呂志さんとおっしゃるのがご主人で、弥生さんが奥さんですね」

と確認するように言った。恩田は厚い手帳を窮屈そうに胸のポケットに収めると、車を出した。

車は先ほどの警察の前を通り過ぎてしばらく走つてから信号を右折すると直ぐ正面に長府駅はあつた。

「ご主人早く見つかるといいですね。奥さんも気を付けてお帰りください」

「本当にいろいろお世話になりました。お店の方にもよろしくお伝えください。もし見つかったら、恩田さんにお知らせします」

「この辺りのことなら多少は詳しいので、今後もお困りのことがあつたら遠慮なく相談してください」

あくまでも親切な恩田副店長の言葉に慰められて、

弥生は山陽本線の電車で自宅に向かった。弥生は時間のことを忘れていたが、まだ正午を少し過ぎたばかりだった。順調にドライブしていれば、今頃は下関の唐戸のカモンワーフで関門海峡を眺めながら昼食を食べているころだ。昼食を済ませてから国道の関門トンネルをくぐって九州に入る予定であつた。

四時半ごろ自宅に帰りついた弥生は、留守番電話

が入っていないかと思つたが、無かつた。弥生は何をしたら良いのか思いつかなかつた。着替えもしないでただぼんやり座つていた。

出かける前には、久しぶりの二泊のドライブなので、二人で興奮しながら計画を練つた。そしてあーでもないこーでもないと選びながら二泊の宿を予約した。

弥生は、急に予約した宿をキャンセルしなくては

ならないことに気がついた。今からのキャンセルでは、既にクレジットカードで払ってある宿賃は全額戻ってこないだろう。しかし、連絡だけはしておかなくてはならない。弥生は今回のドライブの行程表を自分がパソコンで作ったので宿の連絡先についてはわかってる。しかしA四用紙にプリントアウトした行程表は車の中に置いたままのリュックの中だ。いま弥生が持っているのは腰につけたポシェットだ。

けで、それには財布や保険証、家の鍵、携帯電話その他常に身につけておくものしかない。弥生はパソコンを立ち上げて行程表の原稿を開いた。熊本と宮崎の宿の電話番号を確かめてそれぞれの宿にキャンセルの電話をした。

二軒の宿はいずれもキャンセル料として支払った宿泊料の百パーセントを取られた。弥生はどちらの宿にも事情を話して、万一比呂志が行くようなこと

があつたら、広島の自宅か自分の携帯に電話をするように伝言を頼んで電話を切った。この時点で比呂志からは何の連絡も無いようだった。

受話器を置いてから、弥生は

「しまった」

と思った。もし比呂志がそれらの宿に行くことがあつたら、キャンセルしてしまうと泊まるところが無い。弥生は慌てて切ったばかりの電話をもう一度か

けて、比呂志が来なかつた時点でキャンセルにしてもらえないか頼んだ。どちらの宿も事情が事情だけに、それで良いと言つてくれた。

弥生は、とにかく早く広島に帰つて自宅で比呂志からの連絡を待つことばかり考えてきたが、例えば熊本の宿に先回りして待つてみると言う選択肢もあったことに気が付いた。しかし現実には比呂志が自分を置き去りにして一人で車を走らせて最初の宿泊地

である熊本まで行くことはありえないとも思った。

弥生は念のため手帳にそれらの宿の名前と電話番号をメモした。

この作業をしたことで、弥生は比呂志の搜索活動を始めなくてはならないと言う気持ちになってきた。元来活発で活動的な弥生は、謎解きの興味さえ感じ始めるのだった。とは言ってもいまのところ何一つ手がかりはない。

それにしても比呂志はいま何処を一人で走っているのだろうか。九州に向かっているのかそれとも広島に向かっているのか。もちろんそれ以外のどんな可能性も否定できない。

まさかとは思うが、誰かに乗り込まれて、包丁か何かを突きつけられてどこかに連れ去られたと言うことも無いとは言い切れない。でも比呂志を誘拐しても金など出てこない。そんなドジな誘拐犯はいな

いだろう。少なくともあの駐車場で、あの短い時間に目立つ捕り物があったとは思えないから、犯人は運転手が乗っている車を見つけて助手席に乗り込んで、比呂志に運転させてどこかに逃走を図ったのかも知れない。

それとも急に比呂志の頭がおかしくなつて、夫婦でドライブしていることを忘れて、一人のつもりでどこかを走っているのかもしれない。もしそうだつ

たら、熊本に向かったということもありだろうか。しかしそんな状態だったら、交通事故だって起こしそうだ。弥生は考えれば考えるほど不安になるのだった。だがいまは待つしかない。弥生は覚悟を決めた。急に疲れが出てきてその場に横になった。しばらくそうしているうちにうとうととしてきた。

眠り込んだわけではなかったが、弥生は夢を見た。比呂志とドライブしているのだが、運転席の比呂志

がなぜかはつきり見えない。居るのかいないのかはつきりしないのだ。弥生からも比呂志からも話しかけたりしない。車は走り続けているような感じだ。

弥生は運転できないから、運転しているのは比呂志に違いない。比呂志の方を見ると、比呂志は車の窓の外にいるようにも見える。そのとき玄関のベルが鳴ったので比呂志だと思つて小走りに玄関に出たが、八階の人が回覧板を持ってきたのだつた。

隣の比呂志を見るとまだ車の外にいる。回覧板も夢だったのか。今度は電話が鳴った。現実の電話だった。弥生は飛び起きて電話に取り付いた。いつの間にか毛布をかぶって寝込んでしまっていたようだ。電話はワン切りだった。時計を見ると午前二時半だ。夕飯も食わずに随分寝ていたものだ。弥生はコーヒ―を入れ、戸棚にあったビスケットを二、三枚食べた。それからテレビを点けたが、そんな時間にニュ

ースはやっっていない。直ぐに消して、こんどは蒲団を出してちやんと寝ることにした。

夢の続きが出てきた。やはり比呂志とドライブしている。後ろの席に誰か乗っていて、さかんに右だ左だと比呂志に指図している。比呂志はそれに頷きながらひたすら車を走らせている。どう考えても比呂志に違いないのだが、やはり姿がはっきりしない。後部座席はフラットにして荷物が投げ込んである筈

だが、その男はそこに正座の格好で座っているようだ。弥生は見たことがある男だと思った。あのホームセンターの副店長みたいだ。名前を思い出せない。弥生が副店長の名前を思い出そうとしているとき、副店長と比呂志は車の外を並んで歩いているように見える。

〔二日目〕

ぼんやりした夢はいつの間にか消えて眠り込んだ
と思つたら、弥生はまた電話の音に起こされた。も
う外は明るくなつていた。時間は六時を少し回つた
ところだ。今度はワン切りではなくコールは何度も
続いている。弥生は比呂志に違いないと思つて受話
器を取つた。聞いたことのない男の声だった。弥生

が

「藤原です」

と答えると、

「いらっしやいます」

と電話に出た男が傍の誰かに言う声が聞こえた。そして、

「藤原弥生さんですね。車は元通りグートの駐車場に返しておきましたから確認してください。ご主人

は、今日の午後にはお宅の車のところに戻られますから、心配しないで待っていてください」
と事務的な言い方であった。

「主人はどうして居るのですか？」

と弥生は早口で聞き返したが、電話は一方的に切られた。弥生は、比呂志が何らかの事件に巻き込まれたらしいと悟った。しかし電話の男の喋り方は、何となくだが、凶暴な犯罪者のような感じはしなかつ

た。

弥生は、車がグートの駐車場に戻されていると言
うのだから、とりあえず再び現地に行くことにした。
身支度をして、冷蔵庫にあるもので朝食をしている
と電話が鳴った。八時前だった。電話は副店長の恩
田からだった。

「朝早くからすみません。今朝店に来たら、駐車場
に置きっぱなしの車が一台あって、それがお宅の車

だったのでお電話しました」と言う。

弥生は、二時間ほど前にかかってきた電話のことを話した。それに対して恩田は、

「いったいどういうことですかね？」とだけ言った。

弥生は、これからそちらに行くと言って電話を切った。

弥生は、広島駅から山陽本線の岩国行きに乗り、岩国で下関行きに乗り換えて、長府駅からはタクシーでグートに向かった。新幹線で下関まで行って、そこから長府まで戻れば遥かに速いが、弥生には下関と長府の位置関係が頭に入っていないので、それは思いつかなかつた。店には午後一時過ぎに着いた。

弥生はすぐに恩田を訪ねた。恩田は昨日と同じに

ガーデンニング用品売り場にいた。弥生を見つけると、直ぐに仕事の手を休めて近づいてきた。

「お車はあれですね」

と言つて、昨日弥生たちが停めたと思つていた辺りを指差した。そして弥生を伴つて車のところに行つた。

「車は、鍵がかかっているのでドアを開けて見ることはできません。しかし事故などで傷がついている

ような跡はなさそうです」

と恩田が説明した。

恩田は今朝からこの車を外から点検したのだろう。弥生も窓から中の様子を覗き込んだ。特に荒らされたような様子はない。比呂志の青いリュックと自分の赤いリュック、それにそれぞれの帽子もフラットにした後部席にドライブ中と同じように転がっている。

スペアキーは比呂志が免許証に入れて身につけているので、車の中には入れない。それにもう午後になつているのに比呂志は何処からとも現れない。弥生は、

「もうそろそろかもしれないから、ここにいます」と言つて、車の傍を離れなかつた。

弥生は三時ころまでそうしていたが、比呂志が現れるけはいはない。ときどき弥生の立っている方を

見ながら、恩田は何の変化もないことを知ると、弥生の傍に来て声をかけた。

「遅いですね」

「遅いわね。この車は何時ころ戻されたのですか？」
「いや、それはわかりません。ただ昨日の閉店後か今朝開店前であることは確かです。駐車場は閉店三十分後には鎖を張って閉鎖しますから。それから開店の三十分前に開けるまで一般車は入れません。今

朝わたしが八時少し過ぎに来たときには、まだこの
駐車場は開いていないのに、あの車はありましたか
ら」

「閉店は何時なんですか？」

「午後八時です」

「閉店後でも、お店の人などが車で出入りするところ
はあるんですよね？」

「ええ、しかし通常は一般のお客様の車は、その出

入り口の方には行けないようにバリケードがしてあります」

「そのバリケードと言うのは鍵か何かがあつて、一般の客の出入りが出来ないようにしてあるのですか？」

「いや、鍵はありません。一般の車も出入りしようと思えばできます。昨日奥さんをお送りするため、若い者がここまで車を持ってきたときには、そこを

通つてきましたからね。だけど一般の人がそう言う通路があることを知っていないと思います。だからその辺りのことを知っている者が、車を返しに来た可能性が「あります」

弥生は、その従業員用の出入り口のことを気にかかったので、恩田にそこに連れて行つてくれるように頼んだ。恩田は快く了承した。

陳列前の大型商品のストックや、返品なのか壊れ

たような商品が積んであるところを横手に見ながら、広い建物の裏側に出てきた。そこには結構広い駐車スペースがあつて、トラックや、昨日弥生が載せてもらったようなライトバンなどがきちんと並べて停められている。そしてそこに通じる途中が狭くなつている所に、恩田が言うバリケードらしいものがあった。それは一般家庭の駐車場の出入り口に使つてあるような背の低い金属製の伸縮する扉であつた。

近くに行ってみると、それに鍵はかかっていた。そのとき、その辺りには店の人などの姿はなかった。

弥生はしつこいと思われそうなのを我慢して、さらにその駐車スペースの中まで入ってみたいと言った。恩田は

「もちろん」

と言って案内した。弥生はその駐車場から外への出

入り口を確かめたかったのだ。そこには国道に出るための、さっきのよりもしつかりした門扉があつたが、いまは開放されている。

「これはいつ閉まるんですか？」

「そうですね。最後に帰宅する従業員が出るときですから特に決まっていますね。十時ころのこともあれば、もつと遅い事もあります」

「恩田さんが最後に退社されるとは限らないでしょ

うから、昨夜何時まで開いていたかご存じないですよね」

「いや、今度のことがあつたので、今朝出社してから最後に帰つた者に確かめました。十時半ごろだつたと言つてました」

「朝は何時に、どなたが開けられるんですか？」

「早出の当番が二人決まっています、その者たちがそれぞれ鍵を持って帰つて、翌朝は六時に出社します。」

遠方からトラックで荷物が着くこともありますから」

「ありがとうございます。何時、誰が、どのようにして車を持ってきたのか知りたかったもので、余計なことまでお尋ねしてすみませんでした。いずれにしても車が戻されたのは、わたしが広島に帰るためにここを出た後から、閉店か業務用の出入り口が閉められるまでの間と言うことになりますね。今朝早

くということも、ないとは限りませんね」

「そうですね。午後もわたしはあの同じ売り場の辺りにいましたけど、ときどき駐車場は気にして見ていました。なにしろ入れ替わり立ち代りお客様の車が出入りしてきますからね。八時に閉店して後始末を済ませて、わたしが帰る時には、あちらのお客様様駐車場には、たしか車は一台も残っていないかっただと思います」

恩田は車が戻された状況を正確に把握していないことをすまなさそうに言った。そして、

「もしかしたらご主人、戻っておられるかも知れませんが、せんからあちらに行きましようか」

弥生は時計を見た。もう四時近かった。二人は買い物客用の駐車場の方に戻ったが、弥生たちの車がさっきのまま停まっているだけで、比呂志の姿はなかった。

「おかしいですね。電話の相手は午後にはご主人も戻られると言ったのですよね」

「そうなのですが、変ですね」

二人は、このあとどうすれば良いのかわからなくなってしまった。それと弥生は、恩田が電話をしてきた人物についてあまり聞こうとしないことが少し気にかかった。

「やっぱり広島に帰って連絡を待つことにします。」

誰かわからないけど、事情を知っている人から今朝連絡してきたのだから、きつとまたあると思います」

弥生は昨日よりもはるかに頭が回転している。

「ご主人は、もちろん奥様の携帯電話の番号もご存知なのですよね？」

「わかると思います。覚えていなくても手帳か何かに書いているはずですし番号を書いた紙切れをいつも財布と免許証に入れていきますから」

「だったら、この辺りに宿を取られたらいかがですか？ 広島まで四時間くらいかかるんですよ。ここに車がある以上、またおいでになることになると思いますよ」

「それは思いつきませんでした。今日はそうしましょう」

「でしたら、待ちついでに六時ころまで待つてみて、それから宿にご案内します。近くにビジネスホテル

があるのです、それでよかつたら頼んでおきますが」

「何から何まですみません」

「大丈夫です。わたしどもの店長も、店と無関係なことではないので、できるだけのことはして差し上げるようにと言っておりますので」

恩田は、ガーデンニング用品売場の一角に、客の邪魔にならない場所で、弥生の車が見通せるところにパイプ椅子を持ってきてくれた。弥生はそれに座

つて、じつと待ち続けた。六時になつても比呂志は現れないし、車に近づくような者の姿もなかった。

恩田が、いつの間にか私服に着替えてやつてきた。「そろそろ参りましようか。奥さんもお疲れでしたら」

と言つた。

確かに弥生は疲れていた。それどころか、今朝冷蔵庫のあまり物をかきこんでから何も食べていない。

急に空腹も感じた。

「すみません、お願いします」

もう、恩田の親切を辞退するような気力はなかった。恩田はまず食事をしようとして提案した。付き合ってくれるらしいと弥生は思った。この状況ではありがたいことであつた。弥生が何でも良いと言つたので、比較的近いところにあるトンカツ屋に行くことになつた。

「こういうときは栄養を付けとかなきゃ」

と言いながら、恩田は先に立って店に入って行った。弥生も、ドライブ中は一回一回の食費を細かく計算しながら儉約を心がけるのだが、いまは恩田が言うとおりに『栄養をつけなきゃ』と思つて、特選豚のフイレカツ定食と言うのを頼んだ。恩田も同じものにした。もちろん弥生は恩田の分も払うつもりである。こうして改めて私服の恩田と向き合つと、白髪混

じりのなかなか知的でハンサムな紳士だと思った。弥生はしばし事件を忘れて、恩田と世間話をした。

長府のこと、広島のことなどである。恩田も気を使つてか、旅行目的だった九州のことやドライブのことなどには触れないようにしているようだった。

「宿は、朝食のみで五千円のホテルを予約してあります。良かったですでしょうか？ここから遠くありませんが、お送りします」

恩田が遠慮がちに聞いたが、弥生はもちろんありがたいと答えた。そしてテーブルにあったレシートを素早く取り込んだ。恩田も慌てて手を出したが先を越された感じであつた。

「ここは出させてください。そのかわり宿はご自分でお願いします。食事代はお出しするように店長からも命じられていますので。変な言い方ですが、わたしのポケットマネーと言うわけではないのでご心

配なく」

恩田の言葉に、弥生はそれ以上抵抗せずにレシートを渡した。恩田はレジで領収書を取っていた。車で数分のホテルまで送ってもらった弥生は丁寧に礼を言った。恩田は、

「お疲れでしょうから、今日はゆっくり休んでください。それから明日の朝は八時ころお迎えにまいりますので準備して待っていてください。明日は良い

日になるといいですね」
と言つて、走り去つた。

トイレを借りただけの客に面倒なことに巻き込まれたにもかかわらず、親切に対応してくれる恩田や、店長などの配慮に、弥生は感激した。

弥生は早朝からの長い一日に疲れきっていた。部屋に入ると、ごく普通のビジネスホテルの狭いシングル部屋だった。弥生はシャワーだけを簡単に使う

と、あつという間に眠り込んでしまった。

〔三日目〕

ホテルが面している国道の車の音も気にならないくらい、夢も見ないでぐっすり眠れたので、夫が失踪中という不安定な状況にもかかわらず、寝覚めはすこぶる良かった。

恩田が八時には迎えに来ると言っていたので、弥生は七時に二階の食堂に降りて行つた。朝食は簡単なバイキング形式だった。食パン一切れとコーヒート卵焼き、それにフルーツを少しとつた。パンを備え付けのトースターに入れ、焼けるのを待ちながら弥生は何気なく食堂の中を見回した。宿泊客が、半分くらいのテーブルで食事をしている。平日にもかかわらず結構客がいるものだと思つた。いかにも長

府の古い町並みを見物に来たような似たような年齢と思われる中年の女性四人組が賑やかに食卓を囲んでいたが、他はほとんど勤め人風の男性の一人客だ。弥生は窓際の席で、向こうむきに座って食べている男性に気付いた。その後ろ姿が気になったのでまた見た。比呂志の後ろ姿に似ている。そのときトースターの焼き上がり知らせる音がした。弥生はトースターを持って空いたテーブルに座った。席についてか

らも比呂志に似た男が気になった。やはり似ている。着ている物は特徴がなく、比呂志が何を着ていたか弥生は思い出さなかつたが、比呂志が着たこともないような服装ではない。背中の丸め方がそっくりである。弥生は窓の外が見たくなつた風を装つて、その男性の横を通つて窓際に歩いて行つた。やはり比呂志だつた。

「比呂志！」

と弥生は大声を出した。周囲の客が一斉に振り向いた。比呂志もすぐに弥生に気がついたがそれほど驚いたようすはない。比呂志は、

「ああ」

と言ったただけだった。弥生が隣に座って何か言い出そうとしたが、

「食べるものこつちに持って来いよ」

と比呂志が落ち着いた声で言う。弥生が比呂志に気

が付くよりも先に、比呂志は弥生に気付いていたよ
うな態度である。弥生は、自分のテーブルからトレ
ーを持って比呂志の隣に座った。弥生はトレーをテ
ーブルに置くなり、

「いったいどういうこと？」

とこんどは、声をひそめて責める調子をこめて言っ
た。

「どういうことって、ここに二泊したらしい」

「らしい・・・って、あなた、わたしたち二人でドライブしている最中だったのよ。それがどうして急に駐車場から消えてこんなところに二日も泊まってるの？しかも車はいま、あのホームセンターの駐車場にあるのよ。知ってるの？」

「車あるのか。だけど、何がどうなってるのかわからんのだ。誰かに暗示をかけられたような気がするんだ。この宿に来たときのこと、はつきりした記

憶がない。誰かに車に乗せられて来たような気がするが、記憶がぼんやりしていてよく思い出せないんだ。本当なんだ。それよりお前は、誰かが連絡したからここに来たのか？」

比呂志が言っていることを弥生は理解できない。何の必要があつてここに二泊もしたのか。誰かに車に乗せられて来たと言うが、車は昨日の朝からスパーの駐車場にじつとしている。しかし、その前の

日の午前中に弥生がトイレから戻ってきたとき、車は駐車場の何処にもなかった。弥生は、ぼんやりとした調子で話す比呂志に対して、怒りは消え、むしろ比呂志自身にもわからない何かが起きたらしいことを信じ始めた。

比呂志は、弥生を駐車場に置き去りにしたあげく、二日間も姿を消したまままで何の連絡もしなかった。もつとも置き去りにした翌早朝、比呂志からではな

いが、比呂志と車に関するおかしな電話が、ちやうど広島の自宅に帰っていた弥生にかかってくる。比呂志が『誰かが連絡したからここに来たのか』と言うのはそのことなのだろうか。それで弥生は直ぐにホームセンターのグートに戻って来た。そのとき、早朝の電話の予告どおり車は駐車場に戻っていた。そのことは、弥生が家を出る前に恩田からも電話で知らせてきた。しかし早朝の電話の男が午後には戻

ると予告した比呂志の方は、その日ついに姿を現わさなかつた。そして弥生は恩田の紹介したホテルに泊まつて、もう一日比呂志が戻るのを待つことになった。そのいきさつをすべて弥生は比呂志に話した。弥生が詳しく話したことを、比呂志は何も知らないと言う。

弥生が恩田に勧められて泊まつたホテルは、比呂志が泊まつていたのと同じホテルだ。偶然だったの

かもしれない。この地域でホテルと言ったらここしかないのかも知れないと弥生は思った。そう言えば、早朝の誰かわからない人物からの電話は、弥生が自宅に戻っていることを知っているかのようにかかってきた。携帯にではなく、自宅の電話だった。あの電話の男は、比呂志から自宅の電話番号を聞きだしてかけたのだろうか。それだったら、自宅でなく弥生の携帯でもよさそうなものである。比呂志はその

とき弥生が何処で何をしているのか知らないはずである。

「あなた、誰かに家の電話番号聞かれて教えなかつた？」

「いや、聞かれなかつたと思うけど」

比呂志はそれ以上話をせず、食事を口に運んでいく。コーヒーだけを残してトレーのものは全て食べ終わったとき、比呂志は大きく息を吐いて背もたれ

に身体を預けた。弥生は黙ってその姿を見ていたが、比呂志は弥生の方を見ようとしなくて、窓の外に焦点の合わない視線を投げている。弥生は不安になってきた。比呂志の精神に何かが起きたのではないだろうか。

弥生は比呂志を詰問するのを止めて、コーヒーを飲みトーストを口に運んだ。比呂志が前触れもなくボソボソと話し出した。

「誰かが隣に乗り込んできて車を出したんだ。助手席じゃなくて、運転席に乗り込んできた。わしは助手席の方に押しつけられた。それからが思い出せん」

比呂志は両手で頭を抱えるようにして首を後ろに反らすようにした。しばらくそうして目を瞑っていたが、また何か思い出したらしい、

「誰かが車に乗り込んできたとき、話し声がしていたような気がする。一人ではなかつたのかも知れな

い。それにしてもわしが助手席に押しのけられて座
っていたから、もう一人は何処に乗ったのだ。乗っ
たのは一人だけだったのだろうか。いや何となく車
が動いている時に話し声がしていたような気がする。
あー、やつぱりはつきりしない」

「誰か、二人組みにあなたごと車を乗っとられたつ
て言うのね。それで何処に行ったのか思い出さない
の？ だいたいどうしてあなたの記憶がそんなにぼん

やりしているのよ？」

比呂志はまた両手で頭を抱えるような仕草をした。

「何かこの辺が痛い。どうかなくてないか？」

比呂志は後頭部かその左の辺りを弥生に見るよう
に言った。弥生は言われた辺りの髪の毛を掻き分け
るようにして調べた。たしかに左側頭部に少し血が
滲んだように赤くなっているところがあり、その辺
りが少し瘤のように膨れている。

「あなた、ここんところを打つたのよ。たんこぶになつてるわ。押しのけられたときに助手席のドアか窓にぶつけたのじゃないかしら。それとも殴られたとか」

「ああ、左側だから、助手席の窓にぶつけたのかも知れんな」

「あなたいまはもう大丈夫なの？歩ける？八時に恩田さんが迎えに来てくれるから、それでスーパーの

駐車場まで行きましょう。そして車を調べてみましょう。あなた、車のキー持ってるでしょ？」

比呂志は立ち上がってズボンのポケットを探った。右側のポケットにいつものようにキーはあった。比呂志は反射的にズボンの後ろの両側のポケットを調べた。右側に財布が、左側に免許証が普段どおりに入っている。それらはホテルの部屋の枕元にきちんとして置いてあった。比呂志は着衣のまま寝ていたから、

ゴツゴツするのを嫌って、それらを自分でポケットから出して枕もとの台に並べたのかもしれない。比呂志は財布と免許証を出して中を調べたが、金もカード類も抜かれていないようなのでそれぞれポケットに収めた。

「よし、駐車場に行ってみよう。その恩田さんって誰なんだ？」

「あのホームセンターの親切な副店長さん。わたし

が困っているところをいろいろ助けてくれたの。このホテルを取ってくれたのも恩田さん。今日もう一日あなたが戻ってくるのを駐車場で待とうって言ってくださって。ロビーで待ってたら、恩田さんが来てくれると思うわ」

「わかった。先に降りててくれ。わしは部屋に忘れ物がないか、もう一回調べてから降りる」

弥生は比呂志が泊まっていた部屋に行ってみたい

と思つたが、どうせトイレをするくらいだろうと思つて先にロビーに降りることにした。比呂志は、しつかりした足取りでエレベーターの方に歩いていった。

弥生がロビーで待っていると、比呂志がエレベーターから出てきて、カウンターに行き、何ごとか話していたがすぐに弥生のところに来て隣に座つた。何も持っていない比呂志を見て、

「あなた着替えも何も持たずにホテルに泊まったのね。そう言えばあなたのリュック、車の中にそのままあつたわね」

「気がついたらホテルに寝ていたような気がするから、自分でホテルの部屋に行つた覚えがないんだ。誰かに連れて行かれたのだと思う」

「つまりテレビドラマ的に言うと、頭を打つて気を失つたあなたは、二人組みの男に抱えられて、この

ホテルに連れ込まれたと言うことなのね」

「そうだったのかなあ。でもいま聞いたら支払いは済んでいるって言われたよ」

「あら、わたしは自分で払ったわよ。だけど昨夜の食事代は会社に言われているって恩田さんが払ってくれたけど」

「誰が払ったのかわからないけど、何かへんだなあ」

「お早うございます」

声の方を見上げると恩田がホームセンターの制服姿で立っている。恩田は、弥生が比呂志と並んで話していたので、弥生に、

「お知り合いですか？」

と聞いた。

「主人ですよ。主人の藤原比呂志です。さつき朝食に行ったら、この人が朝ごはん食べていたんです。」

しかもここに二泊もしてたんですつて。何があつたのかさっぱりわかりませんが、とにかく車に戻りたいと思いますのでお願いします」

「いずれにしても良かったです。理由はともかくご主人も車も無事戻つたと言うことになりますね。お目でどうぞございます」

弥生は、『お目でとう』は無いだらうと思つた。自分分は長府と広島の間を行つたり来たりしたし、比呂

志は誰かに車ごと乗っ取られて、そのときに頭を打つて気を失ってホテルに連れ込まれていたのである。それだけでなく比呂志がこの場にいたというのに、恩田があまり驚いたようすを見せなかつたことが不思議だつた。『お知り合いですか』と言うのも何だか不自然だつたような気がする。

「じゃ、参りましょうか」

恩田が言つて、三人はホテルを出た。車に乗ると

弥生が恩田に相談するようにつた。

「主人も車も戻つたこと、警察に言つておいた方が良くないですか？」

「そうですね、でもどうせ警察なんて、話だけ聞いてあとは特に何もするわけじゃないでしょうから、放つておいても構わないと思ひますけどね」

「ええ」

弥生は、そんなことでいいのだらうかと釈然としな

かった。

ホームセンターはまだ開店時間になっていながつたが、客用の駐車場はもう開いていた。恩田はそのまま比呂志たちの車の側に車を寄せて、

「では、お気をつけてお帰りください。それとも旅行の続きですか？とにかくお気をつけて」と弥生たちを送り出す言葉をかけた。

「こちらこそ大変お世話になりました。でも主人の

話を聞きますと、どうもはつきりしない点も多いのですが、誰かに無理やり連れ去られるかどうかされたような気がすると言っていますので、一応警察には行っておこうと思います。搜索願も取り下げないといけませんしね」

弥生が言うのと、恩田はまたもその必要はないというニュアンスの言い方をした。

「そうですか。しかしわたしは、こうしてご主人も

車も無事だったわけですから、それ以上警察は何もしないと思いますけどね」

弥生も警察が、比呂志が頭を打って意識が無くなつて、その間に駐車場から連れ出されて、ホテルに監禁されたと言つてもあまり取り合わないかも知れないとは思つた。現実には比呂志が無事な姿と一緒にいるのだから。しかし、一応搜索願の取り下げだけはしておこうと思つた。

その時だった。店のほうから一人の男性社員が走ってくる。側まで来ると男は息を切らせながら、

「副店長、いま事務所に警察が来ていて、何か事件があつたらしいので、副店長も直ぐに来てください」
「直ぐ行く」

と社員に言ってから、

「ではお気をつけて」

と弥生と比呂志に言うのと、二人を残して、恩田はそ

れまでとは打って変わった真剣な表情になって、昨日弥生を案内した業務用の駐車場の方に車を走らせた。

「事件って、まさかわたしたちのことと関係無いわよね」

弥生の言葉に比呂志は何も返事しなかったが、何か思い出そうとしているようだった。そして、
「本当に関係なければいいが。もしかしたらわしは

利用されたのかも知れん」

「あなたが利用されたって、どういう風に？」

「おしというより、車が利用されたのかも知れん」

「だったら、車をこの場所に戻すときにあなたもセツトで戻してくれればいいのに」

「車を早々と戻したと言うことは、少しでも早く犯行に使ったものを元通りにしたかつたんじゃないかな。だけどおしはその人たちの顔を覚えていたり、

やっていることを見たりした可能性があるから、直ぐには返せなかったのじゃないかな。それともわしの頭がふらふらしていて戻せる状態でなかったか」

弥生は比呂志の頭が普通どおりに働き始めているようなので安心した。

「もしそうだとしたら、テレビだったら、あなたは殺されるかどこか山奥の隠れ家か、港の使われていないような倉庫に猿轡をはめられて、ぐるぐるに縛

られているんじゃないの。下関ならそんな倉庫あり
そうじゃない？」

弥生は、何となく推理ゲームを楽しむような調子に
なってきたている。

「戦後直ぐのころの下関ならね。それに彼らは、人
殺しをするほどの凶悪犯じゃなかつたのだらうよ」
「そうだとしても、いったい何のために車かあなた
かを利用したのかしら」

「何か、大急ぎでここから運び出したいものがあつたとか」

二人はとりあえず車のドアを開けて、中を調べた。特に変わったようすはない。弥生は助手席のドアの柱に顔を近づけて調べている。

「たいした出血じゃないから、血なんか付いてないだろ」

「あるわ。これそうじゃない？」

比呂志も運転席から身を乗り出して弥生の指差す辺りを見た。確かに赤くなつて擦つたような痕があった。しかし、それはかすかなもので、別のとくに付いた何かの汚れかもしれない。しかし弥生は、

「これとあなたの頭の傷を警察に見せたら、絶対傷害事件と認めるわよ」

「自分で勝手にぶつけたと言うこともあるじゃないか」

「運転席ならね。助手席と言うのは不自然じゃない？」

「それもそうだな。でもお前が……いやお前はそんなぶつけかたしたことないよね」

「ほかにあなたが見たり聞いたりしたこと無いの？」

「そう言えば、連れ去られたとき運転している男とは別に、もう一人いたような気がする。それは言っ

たよね。何処に乗っていたのだろう」

比呂志はそう言いながら、一旦運転席から降りて後部ドアを開けて中を調べた。後部座席はフラットにしてあつて、自分たちのリュックや道路地図などが投げ込んである。そのようすはここまで走つてきたときのままのように見える。比呂志は運転席の後ろのフラットになった部分に顔を近づけて見たが、土足の足跡の汚れなどは見当たらなかつた。

比呂志は一連の出来事を、時系列的に思い出そうとした。比呂志が、ホテルで気がついてしばらくしてから、女性が比呂志の部屋に入ってきた。水と薬を持って来ていて、それを呑んで安静にするように言っていた。自分がどうしてホテルにいるのか聞いたような気がする。たしかその女性は、救急車で病院に行った後ホテルに連れて来られたと言っていた。彼女が持ってきた薬を飲んでしばらくするとひど

く眠くなつてきたのを覚えている。次に目が覚めてからのことを、比呂志はかなりはつきり覚えていた。同じ女性が食事を部屋に運んできた。比呂志にはそれが朝食か昼食か夕食かわからなかつたので女性に聞いた。女性はホテルに来た次の日の昼食だと言つた。比呂志は、自分はもう何処も悪くないからホテルを出たい、そうしないと家内がどうしているのか心配だと言うと、女性は、奥様には連絡してあ

るから心配ないと言っていた。昼食というのを食べ終わるとまたも猛烈な睡魔に襲われた。

比呂志は、枕もとの電話で目が覚めた。朝食に二階の食堂まで来るようにとの電話だった。比呂志は着の身着のまま寝込んでいたらしい。それも前日の昼食からずっとだ。どうしてそんなに長い時間眠っていたのかも不思議だった。

いつもズボンのポケットに入れてある車のキーと

財布と免許証は、枕もとの台の上にきちんと並べて置いてあった。比呂志はそれらをポケットに納めた。他に自分のものが無いか部屋を見回したが、何も無かったので二階に降りて行った。朝食はバイキング形式だった。

比呂志は、食べたいものをトレーに載せてテーブルについたとき、何気なく見回したら弥生が食べ物を取り集めているところを見た。一瞬弥生と一緒に

泊まったホテルでバイキングの朝食を始めるところのような気がしたが、そんなはずはないことに直ぐ気がついた。

なぜこんなところに弥生がいるのか比呂志にはわからなかった。弥生どころか、自分がどうしてここにいるのかさえ定かでない。比呂志は気持ちを落ち着かせようと、弥生に背を向けたまま食べ始めた。そこへ弥生が比呂志を見つけてやって来たと言うわ

けである。

「とにかく一度警察に行きましよう。昨日、わたし警察でああなたの捜索願い出したの。それも恩田さんにそうするよう勧められたのよね」

そのときはまだ、弥生は恩田を疑うような気持ちはあまり無かったが、恩田の言動が何となく気になつていた。

「それじゃあの人には、お前に警察に行くように勧めたのに、さつきは行ってもしようがないから辞めとけ見たいな言い方してたって言つてたじやないか」

「そうなのよ。どうなってるのかしら」

比呂志たちの車が動き出そうとしたとき、三、四人の人たちが車の方に手を振りながら走ってくるのが見えた。駐車場にはすでにちらほら買い物客の車が入っていた。朝早くから結構客が来るものだ。

走ってくる人たちが、自分たちに手を振っていることは直ぐにわかった。警察官が一人、店の制服姿が二人、他にスーツ姿の男もいる。弥生と比呂志は、さきほど恩田が呼ばれた事件と言うのが自分たちに関係があるらしいことを知った。

窓を開けて待っていた比呂志に、スーツ姿の男が丁寧な言い方で、

「申しわけありません。山口県警の取手と言う者で

す。お聞きしたいことがありますので、少しお時間をいただきたいのですが」

「ここでですか？」

比呂志が聞いた。

「とりあえず」

取手という男が答えた。比呂志はそれではと、出かけた車を駐車線の枠に戻して、車から降りた。

「車に異常はありませんでしたか？」

「ええ、特には気付きませんでした」

そのとき弥生が降りてきて、取手に助手席の血痕らしきものを見るように言った。弥生はさらに比呂志の側頭部の傷と瘤を取手に見てくれと言った。取手はそれらを丁寧に見ていたが、

「確かに何かあるようですね」と言った。

取手は、少し離れた場所で携帯電話をかけていた

が、戻つて来ると比呂志と弥生に何か他にも変わったことが無いか聞いた。

比呂志と弥生は、これまで二人で話してきたようなことを、多少推理も含めて話した。取手はさすがに、弥生の話す推理の部分と事実とをはっきり区別しながら聞いていた。取手がいろいろ聞き出している間、制服の警察官はさかんにメモを取っていた。そのとき一台のワンボックス車が近づいてきた。

警察官の制服ではなく、青い作業服のような二人だったが、この人たちも警察官なのだろう。二人は、道具箱のようなものを持って降りて来た。取手が何ごとか指示した。二人はすぐに、弥生が言った助手席の痕跡を調べ始めた。それが済むと一人が比呂志に近づいて、頭の傷を調べ始めた。そして絆創膏のようなものを傷に押し当ててから剥がした。助手席の血痕と比呂志の血液型を調べるつもりだと弥生は

思った。『よしよし、これで事件に巻き込まれたのかどうかはつきりする』。弥生は半分面白がっているようだった。

その間、もうひとりの青い作業服の警察官が、比呂志たちの車のハンドル、ドアノブその他あらゆる場所の指紋を調べている。そのとき車に差したままになっていたキーの指紋まで調べている。比呂志がさつきから使っているのに、他の者の指紋なんか出

るのだろうか」と弥生は思った。

「もう少し詳しいお話が聞きたいのですが、直ぐそこです。署まで来ていただけませんか」
取手が比呂志に言ったが、比呂志は、

「さつきお話したこと以外は覚えていないので、これ以上聞かれても無駄だと思いますよ」
と答えた。

ところが弥生は、

「面白そうじゃない、一緒に警察に行ってみましようよ。わたしたち、容疑がかけられているわけじゃないのだから」

「それもそうだな。わしが何のために利用されたのかわからんまんまではな」

「では、ご自分の車でお願いできますか？お帰りのこともありますから。場所は、」

と取手が言いかけたとき、弥生が横から、

「知ってます。この国道をもう少しあつちに行つたところですよね」

と下関方面を指差しながら言った。

「そうです。良くご存知ですね」

「おととい、主人の搜索願いを出しに行きましたから」

「そうでしたか。じゃ、その辺のこともお聞きしたいです」

一行はばらばらにそれぞれの車で警察に向かうことになった。

警察までの短い時間だったが、

「やっぱり、誰かが売上金を横領したのかしら」

「そりゃ、これだけの店だから一日の売上金だけでも相当なものだろうな」

「でも売上金で、警備会社かN I T T Uって書いた車で、警備員みたいな格好した人が集めて直ぐに銀

行に運ぶのじやなかいかしら」

「よく知らんな」

警察には直ぐ着いた。着いてみると、取手はもちろんだが、恩田たちスーパーの人たちも来ていて、それぞれの車から降りてきた。

恩田たちとは別に、比呂志達は取手とともに会議室のようなところに案内された。

「どんな事件が起きたのですか？」

弥生は興味津々である。

「詳しいことはこれから調べるところですが、何でもあの店の売上金が警備会社に取りに来る前に盗み出されたと言うことです。それを外部に持ち出すのに、ご主人と言うより、ご主人の車が利用された可能性ががあります。あなた方としては、とんだとばかりに巻き込まれたわけですな」

やっぱり二人の推理どおりだと思つたが、弥生は

そのことは言わず、

「そうなんです。旅行は取り止めざるを得なくなつたし、わたしは広島と長府を行ったり来たり、今日で三日目ですよ」

「すみません。当事者はすでに罪を認めていますので、もうしばらくで終わります。ぜひいろいろ思い出してください」

結局駐車場で話したようなことの繰り返しだった

が、静かな部屋でじっくり話すので、駐車場では出てこなかったこともかなりあつて、取手はここまで来てもらつた甲斐があつたと礼を言つた。

そのときさつき駐車場で血痕や指紋を調べていた青い作業服の一人が入ってきて、取手に耳打ちしてから出て行つた。取手は二人のところに戻ると、

「あなた方としては、店の方に何か言いたいことがありますか？」

と言った。

「損害賠償を求めてもいいのでしようか？旅行中止で戻ってこない宿賃とか、広島長府間の汽車賃とか。

ああ、それから主人が受けた傷のこととか」

「それは店長が来ていますから、直接言ってみてください。われわれとしては、お宅の車の血痕とご主人の血液型が一致しましたし、車に残された指紋も実行犯たちの指紋と一致したので、もう車を使われ

ても構いません。ご主人の傷のことも裁判を起こせば当然、店側に賠償責任が発生すると思いますが、今回の件ではそこまでしなくても、店が話を聞いてくれると思います。われわれとしては、お宅が訴えなければ特に傷害事件とはしないつもりです。どうされますか？店側の対応が不満でしたら、出る所ろに出ると言うことでしょうか。店長をここに来てもらいますから、そのまま待っていてください」

取手は、そう言うのと部屋を出て行つた。かなり待たされたが、店の制服を着た白髪のずんぐりした男性が入ってきた。男性は、いきなり姿勢を低くして比呂志たちに謝罪した。そして、

「いろいろおつしやりたいことがおありと存じますので、一旦店の方に戻つていただけないでしょうか？ 私どもとしては、ご迷惑をおかけした埋め合わせは何なりとさせていただきますので、店の方で、

どうぞ遠慮なくおっしゃってください」
とさらに頭を下げるのだった。

店長は取手に、自分も比呂志たちも店に帰ってもいいか確かめた。取手の了承が得られたので、三人はそれぞれの車で店に帰ることになった。店長は先に比呂志たちの乗った車を、右折で出る誘導をした。先に店に着いて、ガーデニング用品売り場の辺りに弥生と比呂志が立っていると、店長が戻ってきて、

店内に案内した。ガーデニング売り場に恩田の姿はなかつた。

今度は応接室に通された。応接室と言っても、工事の現場事務所に毛が生えたくらいのものだったが、店長が来るまでの間に女性店員が茶菓子を持ってきた。弥生は、蓋付きの湯飲みが、部屋の雰囲気と合わないと思った。

店長が入ってきて、改めて自己紹介をして名刺を

比呂志に渡した。店長はここでも平身低頭して謝罪した。比呂志たちは、何を言えればいいのか迷っていると、

「お聞きしたところでは、九州方面にご旅行中とか、もしご希望でしたら、それが継続できるようにお手伝いさせていたただいてもよろしいのですが。もつともご都合がつけばということですが」

時間はあつたが、すでに当初の二泊三日は過ぎて

いて、今頃は二泊目の宮崎から帰路に就いているころである。二人はどうするか迷ったが、弥生が、

「そうお願い出来たら有難いです。めったにできない旅行がやっと実現したのに、とんでもないことで取り止めになったのですから。宿は二泊ともキャンセルしてしまいました。」

これから同じ所が取れるかどうかわかりませんけど」

「旅行を継続されるということでもよろしいんですね。いまからわたしがやってみましょう。キャンセルなさった宿はわかりますか？」

弥生は手帳を出して店長に示した。手帳には宿の名前と電話番号が書いてある。一旦帰宅してキャンセルの電話をかけたときに、念のため手帳に書いておいたのだ。

店長はまず一軒目に電話をかけた。事情を話し明

日の晩の宿泊を出来るだけいい部屋で頼みたいと言っている。そしてキャンセル料と新たな宿代は自分たちが支払うと付け加えたのだった。電話が済むと、

「運良く空きがあるようなのでお聞きのようになり、明日の一泊を頼みました。よろしかったでしょうか。費用はすべて私どもで持たせていただきます」

「すみません、かえってご迷惑をかけてしまつて」と比呂志。

店長が二軒目の宿に同じような内容の電話をかけているときに、弥生は、

「ご迷惑をかけられたのはこつちなんだから、あんなこと言わなくてもいいのに」と耳打ちした。

「二軒目も大丈夫でした」と店長。

そして店長は、改めて詫びた後、白い封筒を比呂

志の前に差し出した。一目で金が入っていることがわかるものだった。比呂志が、一体どういうことなのかと言う顔をしていると、

「これは、僅かですがお詫びのつもりです。九州の宿の代金はこちらから振り込みますのでご心配要りません。それともうこの時間ですので、お二人は今日もう一日昨夜と同じホテルですが、そこに休まれて、明日ご出発ください。今夜のホテルも支払いの

ご心配は要りません。これはそれ以外の、例えば奥様が広島まで一旦帰られたときの交通費を含めまして、何かと余分な費用もかかったことと思ってお渡しするものですので、どうぞお納め下さい。それから、大変申し上げにくいのですが、今度のこととはどうぞ口外無用でお願いしたいのです。わたしの管理不行き届きで、当社の大切なものが外部に出てしまうと、言う不始末を起こしてしまいました。しかし、これ

はわたしたち内部の問題で、広く世間一般にご迷惑のかかることではないので、どうぞよろしくお願いいたします」

店長は、深々と頭を下げた。そして、顔を上げると、まだ比呂志が受け取っていない白い封筒を、比呂志の方に押し出した。比呂志と弥生は顔を見合わせたが、目と目で受け取ることを了承しあつた。

「では、お言葉に甘えて」

と言つて、比呂志は白い封筒を手を取つた。その感
触から、五万か十万か、あるいはもつとかなと思つ
た。

「恩田さんにはいろいろ親切にしていたただいたので、
よろしくお伝えください」
と弥生が言う。

「いや、恩田は張本人の一人らしいので、どうかそ
のことはお忘れください」

と店長はあわてて言った。この店長の一言で、弥生は恩田に対する疑問が解けた。弥生が、広島に帰っているときに電話がかかってきたことも、携帯にではなく自宅の電話だったことも納得がいった。

これ以上長居しても、店長は何も言いたくなさそうなので、二人はその場を辞することにした。店長と女性店員が車まで送ってきた。そんなにして鄭重に送られるのにふさわしくくないような軽四輪に弥生

と比呂志は乗り込んだ。シートベルトをつけるときに、比呂志は手に持ったままになっていた白い封筒を弥生に渡した。弥生はそれをポシェットに収めた。

まだホテルに行くには早かったので、下関のカモシワーフに行くと言って、その場を離れた。比呂志がバックミラーを見ると、店長と女性店員が、比呂志達の車が国道の車の流れに紛れ込むまで、直立不動で見送っているのがわかった。

店が遠くなつてから、弥生が、

「ちよつと面倒だったけど、もしかしたら儲かつちやつたかもね」

と言いながら、白い封筒を取り出して中身を見た。

「三十万！」

弥生は驚いた。比呂志も驚いた。

「いくら迷惑料と言つても、たったあれだけのことにしては多すぎるんじゃない？それとも持ち出され

たのがよっぽ大金だったのかも知れないわね」

「金、返すわけにもいかんだろ」

「返せないわよ。それに多すぎることは無いと思うわ。貰つときましよ」

「それに今日を入れて三泊分只で、しかも宿に行つたらキャンセル料返してくれるんだよね」

「大儲けね。ちまちましないで豪勢に行きましよう。でもあなた痛い目にあつたのよね。本当にもうどう

も無い？」

「全然」

二人はカモンワーフでゆったりと海峡を眺めながらソフトクリームを食べた。そして恩田たちの起こした事件をいろいろに推理して時間をつぶした。早い夕食をカモンワーフの和食の店で済ませてから、長府のホテルに入った。

ホテルには、店長が言った通りちやんと予約が入れてあった。ただ藤原と言う名前ではなく、グーートの名前での予約となっていた。案内された部屋はデラックスルームだった。昨夜は弥生も比呂志もごく普通のシングルの部屋だったが、デラックスルームは、ソファやテレビのある部屋とベッドルームが二部屋のようになっており、広々とした浴室も更衣室とシャワー室とが別々になっている。低料金のビジ

ネスホテルにもこんな部屋もあるのかと弥生たちは感心した。

二人は、その豪華さにはしやいだ。ゆつくりとシヤワーを使い、二日間の疲れを流した。弥生と比呂志は豪華なベッドで久しぶりにセックスをした。

セックスと言っても比呂志は三年前から前立腺肥大の影響で、最後まで達成する十分なセックスは出来なくなっている。それは夫婦とも仕方が無いと諦

めていることであつた。それでも比呂志は、今夜は二回やろうなどと言つていたが、一回目が済むとあつさり眠り込んでしまつた。

〔四日目〕

翌朝、目を覚ました弥生が、まだ目を覚ましているかどうかわからない比呂志に話しかけた。

「駐車場からあなたがいなくなつたとき、わたしを置き去りにしてどこかに行つてしまつたのかと思つたのよ。側頭部が痛いって言うまで、ずっとそう思つていたの。そうじゃないらしいってわかつて、本当に安心したわ」

ボソボソ喋る弥生の言葉に、目を覚ました比呂志はハツとした。一昨日駐車場で弥生がトイレから戻つてくるのを待つていた比呂志は、トイレを済ませ

て店の入り口から出てくる弥生を見つけた瞬間、彼女を置き去りにする衝動に動かされて車のエンジンをかけ、まさに発進させようとしたのだ。その瞬間だった、誰かに運転席から押しつけられたのだ。

車はあたかも比呂志の衝動に従ったように走り去り、弥生は置き去りにされた。しかしそれは比呂志の行動とは言えない。しかし比呂志はそのときの自分の衝動を思い出してゾツとした。そしてまったくの

偶然によつて事件に巻き込まれたために、自らの衝動によつて行動せずにすんだのである。

比呂志は、そのときの衝動のことを弥生に告白するか迷つた。なぜなら、白川郷では冗談のつもりだつたと、自分でも信じているし、あの時は娘も一緒に笑つて、十メートル動いただけで弥生を待つた。だが今度の場合、冗談だつたような気がしない。よくぞ事件が自分の行動を実行寸前で止めてくれたと

言う思いである。この先何時またそのような衝動に襲われるか不安であつた。

「あなたがそんなことするわけないものね」

弥生は、比呂志の返事が無いので言葉を継いだ。

そう言いながら弥生は、白川郷で底知れない恐怖感に襲われたことを思い出した。弥生は、白川郷での出来事のさらに二十年くらい前の恐怖の体験を思い出した。それは娘の恐怖を母親として共有した体験

だった。

そのとき弥生たちは親子三人で家から二時間くらい
の広い森林公園に出かけていた。娘は四歳だった。
広々してよく整備された公園の林の中で娘は解き放
たれたように走り回って遊んだ。その娘を見て弥生
と比呂志も幸せに包まれていた。

そのころ比呂志はギターに凝っていて、このよう

な時によくギターを持って出かけていた。このときも娘を遊ばせながら、自分はギターを弾こうと、肩に担いで公園内を娘について歩いていた。三人は相撲の土俵くらい小さく盛り上がった芝生のところで弁当を開いた。満腹になった娘は、両親がそこに座っているので安心して、その辺りを走り回ったり、両親から見えない植え込みの陰に隠れたりしながら遊んだ。弥生も比呂志も常に娘の姿を見守りながら

ゆつたり過ごした。比呂志がギターを弾くと言いだした。ちようどその場所は直射日光が差していたので、二十メートルくらい離れたところにある掃除道具などが置かれている小屋の陰で弾くことにした。比呂志一人がそこに行つて弾き始めた。弥生は所在無く娘が遊ぶのを見ていた。娘はだんだん大胆になつてかなり離れたところまで行つては、また帰つてきたりしていた。弥生は弁当や敷物を片付け、ちよ

うどどこかに走って行こうとしている娘に、

「そろそろ帰るから遠くに行きなさんな。お母さん、そこの建物の影でギター弾いてるお父さんをお父さんと呼んでくるからね」

と声をかけた。娘は振り返りながら、

「わかった」

と言つて走って行った。

弥生は、纏めた荷物を持って比呂志を呼びに行つ

た。比呂志はまだギターを弾いていたが、弥生が呼びに来たので弾くのをやめて、楽器をケースに片付け始めた。ふたりが小屋の陰に居たのはほんの二、三分くらいではなかっただろうか。弥生と比呂志が弁当を食べた場所に戻ったとき娘はその辺りに居なかつた。そのうち何処かから姿を現すと思つて、待つていたが娘は現れない。二人はどうもおかしいと思ひ始めた。

「探してくるからあなたはここに居て」

と言つて弥生は娘が走り回つていた辺りを見に行つた。十分くらいも探したが娘は見つからない。二人は迷子の呼び出しをしてもらうために駐車場から公園内への入り口にあつた公園事務所に向かつた。事務所に行く途中でも、注意深く前後左右を見回して娘の姿を捜した。

事務所では直ぐに場内放送をしてくれた。それで

も四歳の娘が放送の内容を的確に聞き取って、放送の指示通りにこの事務所に來ることができるとか心もとなかった。比呂志は弥生には事務所前にいるように言つて、自分は停めてある車の方に行つてみることにした。

比呂志が駐車場の方に歩き始めたときだった、たくさんの車が並んで停めてあるその方角から、娘がトコトコと歩いてくるではないか。娘は泣きもしな

いで事務所の方に歩いてくる。弥生は駆け寄って娘を抱きしめて涙を流した。放送をしてくれた事務所の女性も笑顔でその様子を見ていた。

そのとき弥生が感じた恐怖感は、娘が感じていたのと同じものだった。比呂志も鳥肌が立つような不安に襲われたが、それは母親と娘のへその緒の繋がりととは異なる感覚であつたかもしれない。

つい今の今まで一緒に行動していた者が、ちよつと目を離した隙にいなくなつてしまふと言ふのは、神隠しに遭つたような不思議なもので、置き去りにされた者にとつては、その場に立ち尽くすしかないような心理状態に陥れられるものである。いなくなつた人が直ぐに現れてくれればいいが、そうでないときにはこの世にたった一人取り残されたような恐怖感に襲われるのである。

比呂志は、一度ならず自分が弥生を置き去りにしようとするような衝動に駆られるのが何故なのかわからなかつた。弥生を嫌っていたり、弥生から逃れたいと思つたりしているわけではない。悪戯心からと言うのも少し違う。置き去りは、蒸発と似ていると考へたこともある。あるいは配偶者との死別、自分が先に逝く場合とも似たところがあると思ふのである。

自分が先に逝く場合というのは、弥生より六歳年上の比呂志にとつては、可能性の高いことだから、弥生がそのようなときに落ち着いて行動して欲しいと願っているし、自分の死後も弥生自身の人生をしつかり歩んでもらいたいと思つていたので、そのときの練習が必要だと考えたこともある。しかし、衝動は決して計画的なものではない。比呂志は自宅のマンションのベランダに立って遥か下のアスファル

トを見たとき、このまま飛び降りたらどうなるかと思ふことがよくある。自分が死ぬかどうかではなく、死んだ後の弥生の人生がどうなるのかを考えてしまうのである。もちろん実際に飛び降りそうになったことはこれまでに一度も無い。

比呂志は昨夜の疲れもあつて再び眠つてしまった。朝食は、前日と同じ食堂だったが、昨日とはまる

で状況が違ふ。弥生と比呂志は、旅行がやり直して
きることになつてうきうきしていた。それも余分の
経費無しで、自分たちが予約したよりも上級の部屋
が予約されている。今朝目覚めたときの弥生の疑問
も、比呂志の自分の衝動への不安も忘れて、前向き
な会話に終始した。天気も素晴らしく良かつた。

二人は早々に朝食やトイレを済ませて出発するこ
とにした。二人とも、トイレも順調だった。これは

ある程度歳をとった人間にとって大切なことで、上手くいかないとその日一日、何となく快適でないのである。

フロントに降りたとき、比呂志は思いついてロビ―に置いてある新聞を取ってソファに座った。山口日日新報と言う地元紙だ。比呂志は下関地方のニュースがある面を丁寧に見ている。

「何か書いてある？」

弥生が興味ありそうに覗き込む。比呂志は隅から隅まで見たが、それらしい記事は見つからなかった。比呂志は、何かフロントで自分のことがわからないかと思つた。

「わたし、今日でここに三泊お世話になつたことになるのですが、最初にここに来たときのことを何かご存知じゃないですか？」

「お名前は？」

「それは、今日もそうなんです。わたしの名前じやなくて、グートっていう店の名前になっていませんか。その前の二泊もわたしの名前じゃないと思うのですが」

フロントの男は、

「わたくしは承知していませんので、ちよつと聞いてまいります。恐れ入りますが少々お待ちください」と言つて、事務所の中に入っていった。五分くらい

も待たされたが、別の男が出てきて、

「お待たせしました。お尋ねの件につきましては、当日お受けした者が本日勤務空けになっていておりませんので、わかりかねます。申しわけありません」

「その人は何時出勤されるのですか？お名前はなんとおっしゃるのでですか？」

フロントの男は、カウンターで見えなくなっている台で何かを調べていたが、

「明後日の朝からになっております。山田と言う女性です。出てきたら何かご連絡させましょうか？」
比呂志は、

「そうですね」

と言いながら、弥生に携帯の番号を知らせるように言った。

広島を出発するのと違って、早く九州に入れる。

のんびりドライブには最高であつた。二人は順調に熊本まで走つた。最初の宿泊地の熊本では、昔ながらの雰囲気のある旅館である。しかし、もともと予約したコースではなく、デラックスなコースだつた。それは通された部屋にも、料理にも格段の差として現れていた。その豪華な料理を食べ切るほどの胃袋の力がもう無いのが残念であつた。二人とも料理の一部を恨めしそうに残した。旨そうなのだが食べき

れないのである。しかし、その夜も前夜と同じ調子のセックスをした。何のプレッシャーも無い一日が、二人の身体を活性化させていたのだ。この調子だと、明日も求めてきそうだと弥生は思った。

〔五日目〕

次の日も快晴だった。八代から球磨川沿いに内陸

に入り、宮崎に出たところで二泊目となるコースを予定している。この日の朝も順調に準備が整い、車に乗り込んだ。

「あれ、ポシエツトは？」

弥生はよく持ち物をあちこちに置き忘れる。

「カウンターかな？見てくる」

と言って、旅館に入って行った。このとき弥生は置き去りのことなど頭の何処にもなかった。比呂志に

もなかつたが、比呂志の衝動は突発的に起きる。比呂志は車を発進させて、そのまま走り去つたのだ。

カウンターの所でエンジンの音を聞いて振り返つた弥生は、比呂志が運転する車が走り去る瞬間を見た。カウンターの中の従業員も急いで玄関の外まで走つたが、比呂志の車は既にわからなかつた。ポシエットはロビーのソファの隅にあつたが、弥生は顔面蒼白になつて立ちすくんだ。カウンターに居た二

人の従業員も驚いた様子だったが、若い女性の方が弥生の背中を支えるようにしてソファに座らせた。

弥生はハッピーだった昨日一日ですっかり忘れていたが、いまは迂闊だったことを悔やんだ。弥生は目を瞑って気持ちを落ち着かせた。そして次の宿まで行こうと考えた。カウンターの従業員に列車の時刻などを調べてもらい、そのメモを受け取って、出かけようとしたら、女性の従業員が熊本駅まで送つ

てくれると言う。弥生は素直に好意を受けらることにした。

弥生が思いのほか落ち着いていると思つたのか、車の中で女性は、

「こういうことつてときどきあるのですか？」と聞いた。時々など無いが、けはいを感じることはあると答えた。どういう意味か若い女性には理解できなかつたようだった。

弥生は鹿児島まで新幹線を使い、都城を経て日豊本線で宮崎まで行った。午後二時半ころ宮崎に着いた。駅前のホテルが予約してあったが、チェックイン時間には早かった。事情を話すと部屋に通してくれた。弥生は比呂志もここにやってくると予想していた。しかし例え来なくてもここに泊まるつもりであつた。

部屋はデラックスで、窓からの日向灘の眺めが素

晴らしい。ちようど一隻のフェリーが航跡を描いて港に入ってくるころだった。比呂志は車で計画したコースを走って来るとしたら、夕方になるだろう。弥生は街を散歩することにした。

夕方になっても比呂志は来なかつた。弥生はたった一人で豪勢な夕食を食べた。比呂志は思いがけなく時間がかかっているのかもしれないと思つて、何度も受付に連絡が入っていないか問い合寄せた。

比呂志はどうしてこんなことをするのだろう、弥生は怒りの混じった何とも言えない胸騒ぎで、眠れない夜を過ごした。

〔六日目、そして・・・〕

朝食を済ませた弥生は、直ぐに列車で帰途に着いた。駅で調べると、もう一度鹿児島まで行って、新

幹線を乗り継いで帰ったほうが早いことがわかった。弥生は、この際少しでも早く家に帰って比呂志からの連絡を待とうと考えて、新幹線乗り継ぎにした。

広島には三時過ぎに着いた。弥生が自宅マンションまで帰って来たとき、駐車場の決まった場所に我が家の車は無かった。比呂志は帰っていない。

比呂志が熊本で弥生を置き去りにした後、宮崎の宿にも寄っていないので、もしそのまま直接帰宅し

たとしたら、家に着いていてもおかしくない時間だ。それともどこかに泊まるか車中泊をしながらだったら、まだ帰っていないということも考えられる。弥生は待つしかないと覚悟を決めた。

ところが三日待っても、一週間待っても比呂志は返ってこなかった。何の連絡もない。銀行のキャッシュカードもクレジットカードも持っているはずだ

から、当面食べるにも泊まるにも金に困ることはない。しかしこれまでの長い結婚生活で、比呂志はそんな自由気ままな過ごし方をしたことは一度も無かった。いま急にそのような暮らしがしてみたくなくなったのだろうか。そうだとしたら、気がつかなかったが、自分は比呂志に何らかの束縛感を与えていたのだろうか。弥生はさまざまなことを考えた。

十日経ったときに弥生は、比呂志の失踪届けを出

した。長府での経験があるので多くは期待しなかったが、少なくとも事故や変死体で見つかったら連絡があるだろうと考えた。本当はそんなことになる前に見つかって欲しいのだが、弥生には何の手がかりもなかった。

一ヶ月経ったころ、弥生自身が生活費を引き出すために銀行の通帳を見て、その一週間くらい前に五万円が引き出されていることがわかった。通帳は弥

生が、キヤツシユカードを比呂志が持っている。つまり、少なくとも一週間前にはどこかで生きていることがわかった。弥生はそれまでの不安と緊張から開放されたような気持ちになった。弥生は、比呂志がとにかく生きていてくれたらいいと思うようになっていた。そうしたらいつかはひよっこりと帰ってくるかも知れない。

弥生もすっかり忘れていたが、長府のホテルの山

田と言うフロントの女性からは何の連絡もなかった。弥生の方からも問い合わせたりしていないので、ちようど良いと思っっているのかも知れない。

それから一年。弥生は銀行の通帳やクレジットカードやガソリンのカードの使用明細を見て、比呂志が生きていることを確認する生活を続けていた。比呂志は、どんな暮らしをしているのか、現金は月に

数万円しか下ろしていない。それではホテルなどには泊まれそうにない。カード払いの出来る宿に泊まっているのだらうか。そのような宿の選び方は、いつもなら弥生がやっていた。いざとなったら比呂志にもできないことはないだらう。しかし、送られてくるクレジットカードの使用明細に、それらしい支出は表れていない。

それともずっと車中泊なのだらうか。今回のドラ

イブでは車中泊の予定はなかったもので、毛布などは積み込んでいない。寒い季節もやはり車の中で過ごしたのだろうか。きつと、車があるだけましかもしれないが、事実上ホームレス状態ではないか。弥生は、

「早く帰ってきてきて」と叫びたかった。

テレビドラマでは、蒸発した男は、何処か見知ら

ぬ遠くの町で女と暮らしているか、遺体で見つかるかだらう。歳だけでなく、比呂志のあの身体では女と言う線はないと弥生は考えた。永年一緒に暮らしてきた自分だからそれなりの夜の楽しみ方もしているが、普通の女には通用しないだらう。だとしたら、比呂志自身が帰る気になるか、遺体で発見されるかのどちらかしか無い。

弥生は一人の生活に少しづつ慣れてきていた。比呂志のことを考えない何日かもあるようになっていた。

そんなある日、弥生の部屋の呼び鈴がなった。弥生は一人になってから用心深くなっていた。インターフォンが鳴っても必ず確かめてからしか玄関を開けない。弥生はインターフォンの画像を見た。そこに映っているのは紛れもなく比呂志だった。きちんと

と髭も剃った顔である。だが、弥生は直ぐに返事もしなかったし、跳んで行って玄関を開ける行動を取らなかった。何故か、インターフォンを切って部屋の奥の隅に行つてうずくまってしまった。弥生は自分でもわかるほど、そのとき身も心も硬直してしまつていた。何故素直に心と身体が動かないのかわからなかった。これまでに溜まりに溜まつた怒りや不安や願望やらが混じり合つて一気に込み上げていた

のだ。

もう一度ベルが鳴った。弥生は動かなかつた。しばらくしてまた鳴った。弥生は無視した。もう一度鳴ったら出ようと思ったが、呼び鈴はもう鳴らなかつた。弥生は自分の膝が震えているのを感じた。しかし次の瞬間飛び上がるように立ち上がって、真下に駐車場が見えるベランダに走った。決められた駐車枠に見慣れた我が家の軽四輪が停まっていて、い

ままさにドアを開けて比呂志が乗り込もうとしている。弥生は、

「比呂志！！」

と叫んだ。金切り声になっていた。

比呂志が開けかけた車のドアに手をかけたまま振り向いて見上げた。しばらく見上げたままの姿勢でじつとしていたがやがてドアを閉めて、後部ドアを開け赤と青の二つのリュックを取り出して肩にかけ

ると、車のロックをしてマンションの玄関の方に向かつて歩き始めた。

弥生は二度と比呂志を一人で走り去るようなことはさせないと決心しながら、玄関を開けて比呂志がエレベーターから出てくるのを待った。

(了)

*この物語はすべてフィクションであり、登場する

人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」く手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

蒸発の衝動

2022年9月10日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：シルエットAC

・タイトル：車

素材のID：176361

・タイトル：ダンサー女性

素材のID：110675

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
